



ラオス視察ツアーの報告

1998年7月21日から7月24日、ラオスを訪問しました。同行してくださったのは高木史江さん、阿部貴美子さん、阿部雅昭さんの3人です。日程は以下でした。

7月20日 バンコク集合

7月21日 バンコクからビエンチャンへ
ラオス側スタッフと打ち合わせ

7月22日 ナラート村、ドンカルム村訪問

7月23日 国立マホソト病院見学
JSRC 図書館見学
ノンサワン村訪問

阿部貴美子さん、阿部雅昭さん帰国へ

7月24日 日本大使館へ報告
バンコクへ

雨期の始まりで蒸し暑い日々でした。しかし例年に比べ雨が異常に少ないと心配されていました。

学校は夏休みの最中で授業は観ることができませんでしたが、学校の建物、井戸、ト

イレ等を見ました。

ナラート小学校では校長先生はじめ先生方3人が待っていてくださり、じゃっど支援の校舎の出来上がり具合、トイレの清掃状況など説明をしてくださいました。

ナラート小学校：

児童140人 就学率100%

5学年 各学年1クラスずつ

じゃっど援助 1996年 井戸

1997年 健康教育 健康診断等開始

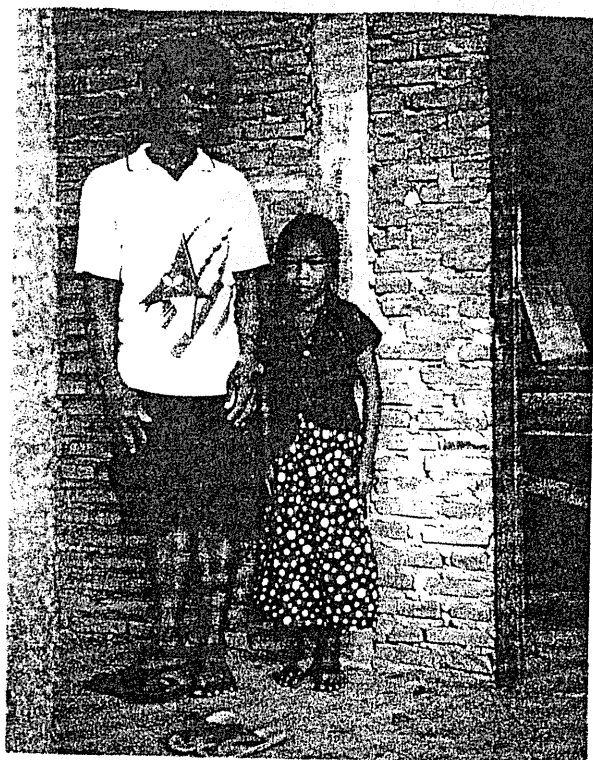
1998年 校舎の壁

校舎は前回までは床、柱、屋根、部屋の仕切り壁だけでしたが、煉瓦積みの壁ができていました。窓の扉とドアはこれからですが、村人達に自分たちで用意してもらう事になっています。机といすは今回ツアー参加の阿部貴美子さん、阿部雅昭さんからの御寄付により作製することになりました。ビエンチャン市内で作り、運び入れます。

トイレは他の援助でできたものですが、簡易

水洗の水はじゃっどの井戸から引いてあります。毎週金曜日に当番が清掃を行っているとのことでした。

学校見学の後、村をぐるっと一周させてもらい校長先生の自宅も拝見しました。



写真：健康診断用に柱にメモリを付けました。と説明する先生と児童。（ナラート小学校）

ドンカルム村では小中学校と保健所を訪問しました。

ドンカルム小中学校

小学生

中学生

じゃっど援助 1992 年開始

健康教育、健康診断、文房具供与、
机・いす供与、井戸、トイレ、
中学校校舎など

日本政府・草の根無償の援助により小学校校舎の新築が始まっていました。

井戸はタンクのふたが壊れており、井戸からくみ上げてそのまま使うようになっていました。モーターを使ってくみ上げるので電気代がかかるのではないかと。子供たちは使い難いのではないかと。手押しポンプを付けた方が良いのではないかと等をドクター・ソムチットから校長先生と相談してもらうことにしました。

タドゥア村へは道路の冠水により行けませんでした。

タドゥア小学校

児童数

じゃっど援助 1995 年開始

健康教育、健康診断、文房具供与、
机・いす供与、井戸、校舎など

ノンサワン村では私（帖佐理子）の友人の家を訪ねました。ちょっと町外れとはいえビエンチャン市のシンボルであるタットルアン寺院の尖塔が見えている距離なのです。郊外の村と同じような家と町の中心と同じような家が混在しています。

ノンサワン小学校

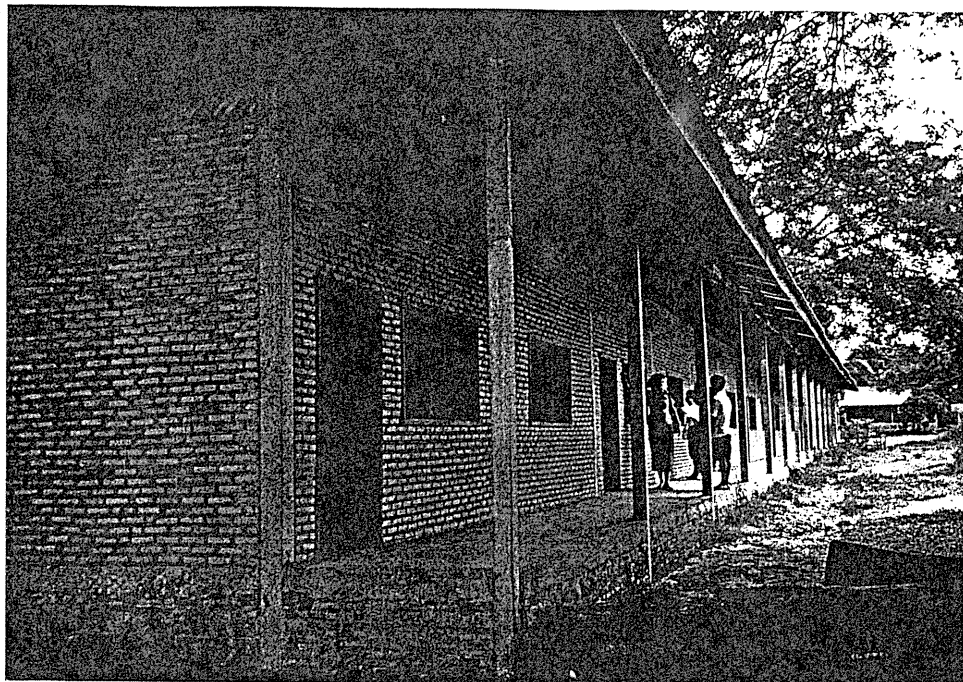
小学生

じゃっど援助 1995 年開始

健康教育、健康診断、文房具供与
机・いす供与、井戸、トイレなど

この村は町に近いので現金収入のある父母は子供たちを私立の小学校へ通わせています。この小学校の父母は現金収入が少なく校舎の補修ができませんでした。じゃっどの援助で井戸、トイレ、教室備品をそろえ、他の

援助で校舎を建て替えました。校長が変わり、活気が出て通学生が増えつつあるところです。



ナラート小学校の校舎
壁ができてきました。

ドアと窓の扉は村で
負担することになって
います。

村の人口は793人
ですが、140人の小学
生がいます。25人から
30人ずつ5学年です。
今年は19人が中学校へ
進学しました。

23日は病院見学の後、JSRCの事務所を訪ねました。JSRCとは曹洞宗ボランティア会のことです。ビエンチャンに事務所があり日本人スタッフ4名、ラオス人スタッフ23人で子供の教育関係の援助をされています。図書室をみせていただきました。JSRCで出版されているラオスの民話の絵本などをじゃっとは購入して援助対象校に配布しています。ラオスの教育事情なども訪問の度に教えていただいております。

日本大使館へは郵政省からの配分金をいただいて活動している内容など報告してきました。

だいたい半年毎に訪問しているビエンチャンですが、町の様子が急ピッチで変わっています。大きな樹の並ぶ気持ちの良い、けれど運転し難い道路は全部の樹が切り倒され広い道路に変わりました。前回はタイ風のショッピングセンターができていて驚いたのに今回はもう閉鎖されていました。また、1ドルが1992年には600kip（ラオスの通貨）でした。1995年には720kip、それが1997年には1,000kipになり1998年7月はなんと3,500kipでした。ほとんどの商品を輸入に頼っているラオスでは物価がどんどん

上がっています。しかし、お給料はそのままです。政府の優秀な人たちが高給にひかれ外国資本の企業などに転職していました。残念なことです。給料に10倍から50倍もの差があるとの事、何も言えませんでした。

物価の上昇に伴いコソドロが増えているようですが暴動などは起こらないようです。ただ以前は見かけなかった子供の物乞いがいて悲しいでした。

同行の阿部貴美子さん、阿部雅昭さんは2泊、高木さんは3泊という短い滞在でした。

でも旅慣れた方々だったのでバンコク集合バンコク解散とし、ビエンチャン滞在中も朝から夜まで村訪問の合間はお寺や市場、メコン川沿いの青空ビヤホールをトゥクトゥク（オートバイの後ろに屋根付きリヤカーが付いたタクシー）で周りました。元気に付き合ってくださり、感想、意見をもらってとてもありがたかったです。

昨年5月のツアー以来、帖佐理子が1人で視察と打ち合わせに行っておりましたがいろいろな方々の違う見方からのご意見が大切だと再認識しました。また、ツアーを再開いたします。ぜひ、ご応募ください。

（帖佐理子）

参加者の声

阿部貴美子さん：普通の訪問客よりもずっと多くのものを見ることができたと思います。ラオスは思ったよりもかなり貧しかったです。仏像などの破損の進んだ状況を見るとこの国が王室や寺という国や社会の一部にすら力を蓄えることができず（たぶん周辺諸国や西欧列強の脅威や搾取のために）国や社会が非常に高い価値を置いているものにすら十分に守れずに、貧困や内戦に曝してきた事実が迫ってきます。体制の変革で、富が海外に持ち出されていいることも関係しているでしょうが。

一部のコミュニティ・レベルの人々や医師、教師、官僚の中に素晴らしい人材がいることは目のあたりにし、このような人々のいる地域、職場はきっと改善と発展がもたらせると思います。しかし、国あるいは地方の行政の能力が弱い状況が長く続くと、大多数の貧乏人はいつまでも貧乏のままか、貨幣経済が浸透してくると相対的にますます貧乏になってしまいます。

フランス植民地政策で「ラオスに金をかける気がなかった。」ことは知識として知ってはいましたが、今回、現実を見ると怒りより悲しくなってしまう。

ラオスについて、やや悲観的なことを書きましたが、ソムチットさんやコンサップさんのように素晴らしい人材もいるので、日本

も含めて国際協力機関がそういう人材と“じゃっど”のようにうまく連携していき、また、その人々に報いていけば時間がかかってもやがてラオス全体の社会が普通の住民にとってより住みやすいものとなっていくと考えています。

それでは、またお目にかかるのを楽しみにしています。

阿部雅昭さん：ラオスでは、多くの人に会い、様々な状況を見聞し、おいしいものを食べて... と楽しく貴重な経験を味わうことができました。そして何より理子さんがラオスとラオスの人々のことが本当に好きなことが伝わってきました。私達もこれから少しずつでもお役に立てればと感じています。今回の旅で少々、残念なのは、あと 1、2 日でもゆっくり滞在できればさらにもっと多くのことを経験できたかなという点と、訪れた学校が夏休み中だったことです。ぜひ、またラオスをたずねてみたいと思っています。激動の時代が始まったラオスのその方向とスピードを自分で確かめる機会をつくりたいと思います。また、機会があれば、ご一緒させてください。社交辞令でなく、本当に、また機会があればと思います。ありがとうございました。

メコン川岸の青空ビヤガーデンでビールを飲み焼き鳥を食べる阿部雅昭さん、阿部貴美子さん、高木さん（左から）。

屋台のような料理台とテーブル2つ。向こう岸にタイの灯が明るく見える。この後、雨が降った。

